

チャペル・メッセージ

★今週の聖書：ヨハネによる福音書 21章15～17節(聖書を開けてください。)

★今週の賛美歌：453番

★「愛しているなら」

連休の Stay Home、スーパーでは軒並み、バター、小麦粉、イーストなどの製菓材料が品切れ状態になりました。家でじっとしている時だからこそ、お菓子やパンの良い香りではっと和らいだ気分になってほしい、そう思ってお菓子やパンを焼く人たちが増えているようです。家族のため、愛する人のために素敵なお菓子を焼いてあげたい。先日の日曜は「母の日」でしたから、お花に添えて、感謝の気持ちを込めてお菓子を焼いた人もあったでしょう。愛は、私たちを優しい気持ちにさせ、誰かの幸せのために、時間や労力を喜んで差し出すように動機づける、大いなる力です。

さて、今日、私たちが一緒に読む「ヨハネによる福音書」の箇所は、連休前のチャペルで読んだ箇所の続きです。復活のイエスと、イエスの弟子たちは「ティベリアス湖畔」で、朝食をともにしました。イエスの復活にまだ半信半疑の弟子たちが、漸く、この湖畔での朝食を通して、復活のイエスの存在を日々の生活の中に根付かせ、「平和」を得る、という物語の、その続きです。

食事の後、イエスはシモン・ペトロを名指しして、畳みかけるように、よく似ているけれども少しずつ違う問いを3度、投げかけました。

「ヨハネの子シモン、この人たち以上にわたしを愛しているか」(15節)

「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」(16節)

「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか。」(17節)

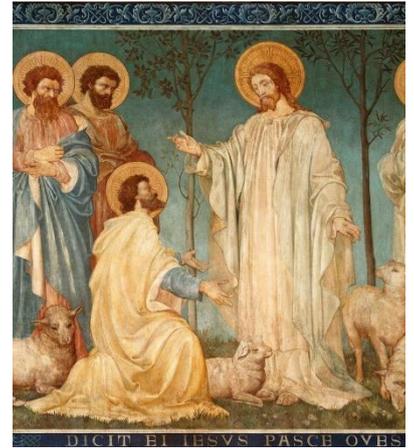
これに対してシモンは、

「はい、主よ、わたしがあなたを愛していることは、あなたをご存じです」(15・16節)

「主よ、あなたは何もかもご存じです。わたしがあなたを愛していることを、あなたはよく知っておられます。」(17節) と答えました。

まず1度目と2度目のイエスの問いかけに大きな変化があります。最初の問いは、シモンに、「あなたが一番」かどうかを問うものでしたが、2度目には、イエスは他の弟子との比較を求めませんでした。それは恐らく、シモンが「私がどれほどあなたのことを愛しているかはよく知っているでしょう？」と応答したからでしょう。私の愛と誰かの愛を、どうやって比較しようというのでしょうか。「私のあなたへの愛を量るのは、ただあなただけです」。珍しく(!)良い応答をしたシモンでした。でも、一方でシモンはイエスの問いにうまくみ合わない応答もしています。但し、それは日本語の翻訳で読んでいるときには気が付きません。

イエスの、1度目と2度目の間で「愛する」には「アガペー」というギリシャ語が使われていますが、これに対して、シモンが「イエスを愛する」という言葉には別の単語、「フィリア」が使われているのです。「フィリア」とは深い友愛の情を示す言葉です。教師として、そして近しい友として、シモンは心からイエスを敬慕し、深く「愛している」というニュアンスが伝わります。では、イエスの問いに使われている「アガペー」と、どう違うのでしょうか。「アガペー」は、新約聖書の福音書や手紙の中では例外なく、「神の、人間に対する愛」を指し示す言葉です。創造主である神が、被造物(神に造られたもの)である人(とこの世界全て)を、何にも代えがたいものとして無条件に愛する、という動詞が「アガペー」です。キリスト教信仰においては、この



「私の羊を飼いなさい」より(部分)、John Clayton, Jr. 作(19世紀末) フレスコ壁画。the Church of St. Mary Abbots, London. (<https://jp.123rf.com>よりダウンロード)

「アガペー」は、人間のすべての罪の贖いとして神が差し出された最大の犠牲としてのイエスの十字架の死に現れる、と信じます。そして、イエスが復活したことを通して、神が人を無条件に赦し受け容れ、愛する関係が回復された、と信じます。そのことを踏まえて、復活のイエスがシモンに「あなたは私を愛（アガペー）するか」と問いかけることは非常に重要です。復活のイエスによって示された神の愛と同じ愛で、「私＝イエス・キリスト」を愛するか、と問いかけているからです。ところがシモンは、最初の2回は「はい！」と即座に回答しながらも、「私があなただけを深く敬愛（フィリア）していることはご存じでしょう」と続けるのでした。

イエスが、繰り返しシモンによく似た問いを投げかける理由が、解ってきましたか？そう、イエスはきっと「シモン、落ち着いてよく聞こう。もう一度言うよ。」という気持ちだったに違いありません。シモンは、イエスの問いかけの一番大事なところが汲み取れないままですから。シモンがイエスを慕い、深い友愛の情を抱いていることに、イエスが疑いを持っているのではないのです。が、イエスの問いは、その先へとシモンを連れ出そうとするものでした。今までと同様の敬愛の情、というイエスへの「愛」は、男性女性を問わず、弟子のだれでもが、比べようもなく貴いものをイエスに捧げていることは、復活のイエスにとっても疑いのないことでした。しかしイエスは「以前のイエス」と同じではありません。イエスは「復旧」したのではなく、「復活」したのです。それは歴史上あったことのない、まったく新しい命の形です。その「まったく新しいイエス」とのこれからの関係性は、「前のまま」とはいかないからです。だから。

イエスは3度目にシモンに問いました。ただ、その折に、イエスはシモンの「愛」を受け容れました。3度目、イエスは、その問いのなかで「愛する」という言葉に、シモンが繰り返す「フィリア」を使います。2度ならず3度も、「イエスを愛しているかどうか」と確認されたシモンは、自分が信用されていないのか、と悲観しますが、それでもシモンはやはり、「あなたは、私の愛がどれほどが全てご存じです」と、真摯にイエスへの敬愛の念を伝えます。

イエスの求める「愛」とは少々かみ合わないシモンの「愛」、しかし貴い「愛」を、懸命に告白するシモンに対し、イエスは「私の子羊たちを養いなさい」、「私の羊（の群れ）を世話しなさい」、「私の羊（の群れ）を養いなさい」、と役割＝使命を与えました。「養う」とは「餌をやって育てる」という意味の言葉、「世話する」には、一つの群れとして導き育て、という意味があります。「羊」は、聖書全体を通して、神＝羊飼、に対して、人間（イスラエル民族）＝羊の群れという比喩が使われますので、シモンには、多くの人々に食べさせ、水を飲ませ、命を守り、一つの群れ、神に愛された人々の共同体として成長するよう指導し育ててゆく役割が与えられた、と理解できるでしょう。それは、とても大きな責任です。その責任を「私を愛しているならば」、そのようにしてその愛を示してほしい、とイエスはシモンに迫ったのでした。

本当は、神が人を全て受け入れ赦して愛する、その同じ愛で、この使命を果たすように、という、ハードルの高い使命でした。しかし最後には、イエスに対する深い敬愛の情という愛に動機付けられたシモンが、そのまま、復活のイエスの与える使命へと招き入れられるのでした。それは、シモンだけでなく私たち「平凡な」全ての人間に対しての、神の愛（アガペー）の故でしょう。私たちは誰も、神に愛されるその愛と同様のものを神に捧げ返したり、他者に与えることはきっとできないでしょう。しかし、弟子たちと一緒にこの地上の人生を生き、復活して再び私たちを訪れてくださるイエスへの敬愛を動機にして、この「大きな責任」を引き受け、誰かの幸せのために、時間や労力を献げて仕えることは、できるかもしれません。なぜなら、私たちの「平凡な」互いへの愛が、どれほど大きな力を生むかを、私たちも知っているからです。

1輪の花や、ささやかなお菓子に現れる、私たちの「愛」の働きと、復活のイエスの、シモンへの、そして私たちへの委託への応答を、つなげることができるのではないのでしょうか。

【祈り】

神さま、私たちの互いへの愛が、あなたから受ける愛に動機づけられたものでありますように。私たちの愛の業を、あなたへの応答としてください。アーメン。

★今週の賛美歌：453 番

会衆賛美

https://www.youtube.com/watch?v=7viZR_5mC0s

オルガン「コラール前奏曲」(編曲版)

https://www.youtube.com/watch?v=a_5MQs9zE_g

オルガニスト：Willem van Twillert (オランダ・アマースフルト)